

令和3年度 第1回岡山県子ども読書活動推進会議（議事要旨）

令和3年7月21日（水）15:00～17:00

Z o o mによるオンライン会議

出席者 相賀委員、大園委員、徳山委員、久次委員、廣瀬委員、藤森委員、
松本委員、三宅委員、湯澤委員

1 開 会

2 会長の選出（湯澤会長）

3 議事運営等に関する申し合わせ

4 議 事

（1）第4次岡山県子ども読書活動推進計画期間中の取組について

- 現代の中学生は、ライトノベルや短い時間で読める本を好む傾向があると言われていたが、令和2年度作成の「もっとおもしろ読書事典」を見ると、自分と向き合ったり、自分の人生について考えたりするような本にも中学生が多くコメントを寄せていて興味深い。
- 普遍的な良書が時には、時代背景などを想像しにくくなっていて、子どもたちにとって共感しにくい場合がある。時に、現代の中学生を取り巻く環境に沿うようなテーマ（例えば、グローバル化、家族の多様化、LGBT、ヤングケアラー等）が子どもたちにとって受け入れやすい場合があり、小学校低学年以降を対象に多くの本が出版されている。
- 「もっとおもしろ読書事典」には、現代の中学生を取り巻く環境に沿うようなテーマで、近年に発行された本が意識して組み込まれている。「もっとおもしろ読書事典」図書セットとしてそのような本が各中学校へ届くのは有り難い。
- 子どもたちにとって、実物の本を手に取りながら読書に親しむのは大切だ。
- 紙の本だけでなく、電子図書館サービスで電子書籍の貸出も開始したとのことで期待している。
- 県教育委員会の取組で、中学生が電子書籍を読めるというのがあまり知られていないのではないか。学校内で教員と児童・生徒が使っているオンラインツール等を活用して周知してもらうなど、広報の仕方に工夫が必要である。
- GIGA スクール構想で子どもたちに1人1台端末が与えられて読書でも活用できるチャンスを得ている。クラス全員が同時に同じ電子書籍を読んだり、朝読書で活用したりしようとした場合には、現在のライセンス数では少ないため、今後追加を検討されることを期待する。
- 他県自治体では、管内の小中学生に電子図書館のIDとパスワードを発行し、在学中は個人で所有する端末で利用できるだけでなく、学校内では、担当教員が借りた電子書籍を黒板等に映し出し、児童・生徒と共有することも可能とする契約

を結んでいる事例がある。

○県立図書館では、電子書籍についてまだ導入を含めて検討中である。

【2】 中学生の読書環境に関する実態調査の結果について

【1. 読書の環境】

- 本調査で「読書をする場所」の割合が学校の教室で高かったように、中学生をはじめ子どもたちにとって一番身近な場所は学校であり、学校の読書環境の充実が必要不可欠である。
- 本調査で「読書をする場所」や「本・絵本を手に入れる場所」の割合が学校図書館（図書室）で低いが、調査時期（令和3年4月～5月）に、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から学校図書館（図書室）の利用を制限していた学校があり、回答に影響していると考えられる。
- 本調査で「読書をする場所」の割合が学校図書館（図書室）で低く、学校の教室で高いが、学校図書館（図書室）で借りた本を学校の教室へ持ち帰って読む生徒は少なくない。
- 平成22年に実施された岡山県青少年の意識等に関する調査では中学生の不読率は27.6%であり、本調査では中学生の不読率は12.8%であるので、単純比較はできないとしても県内の不読率は低減しているという分析をしても良いのではないか。
- 「読書をする場所」の割合が学校の教室で高いことについて、各校の朝読書の実施状況と照らし合わせて分析すると関連性が見えてくるのではないか。

【2. 読書の意識】

- 読書嫌いの中学生の中には、本やマンガであるに関わらず活字を読むこと自体に苦手意識のある中学生がいると考える。活字を読むためには継続した修練が必要であり、朝読書などで活字を読む時間が学校で確保されていることには読書支援としてとても意味がある。
- 学校の取組として毎日の朝読書を継続している学校がある。教科の小テストに時間を充てなければならぬなどの理由から毎日朝読書を実施することは難しいという話も聞くが、多くの学校で週何日かの朝読書は実施している。
- 小学校では、朝読書をきっかけに、図書の時間には読み聞かせを行うなど、継続的に読書を行うよう促している。教員の働きかけによってマンガではなく活字の本を手にとる児童もおり、読書の広がりや教員の働きかけも大きく影響する。
- 中学生期から高校生期にかけて、ライトノベルやマンガが好きな生徒はそればかりを好んで読む傾向が見られ、一般的な小説なノンフィクション等の他の分野へ読書の幅を広げることの難しさを感じる。
- 読書の幅を広げる取組として、学校図書館内に幅広いジャンルの本を目に見えるかたちで展示したり、POPをつけて本を紹介したりするなどの工夫を行っている。また、広報も紙の図書館便りだけでなく、ホームページへの掲載やオン

ラインツール (GoogleClassroom) での共有など生徒へ情報が届くよう取り組んでいる。

【3. 読書をしない理由と読書のきっかけ】

- 本調査で中学生の自由に使える時間の使い方の割合は「YouTube を見る」「LINE などの SNS をする」で高いが、YouTube や Twitter は自分の趣味・趣向に近いものばかりが表示されるようになっており、中毒性があると感じる。インターネット上の情報と正しく付き合うための情報教育も必要である。

(3) 今後の取組の方向性について

- 令和4年度の取組の方向性について異論なし。
- 小学生や高校生を対象に読書に関する実態調査を行う際には、調査の目的を明確にし、分かりやすく示した上で実施してほしい。学校では朝読書、読み聞かせ、図書の時間などの読書の時間を確保しているはずなのに、1ヶ月の読書数が0冊だと認識している子どもたちが一定数いることから、調査項目の見直しも含めて検討してほしい。
- 読書推進の取組において、本があるだけでは不十分であり、本を子どもたちへ届けるためには、学校の教員や司書等の「人」を介した働きかけが必要である。学校に司書が常駐することが望ましいが、地域の実情にあわせて公共図書館との協力により働きかけを行ってほしい。
- 「もっとおもしろ読書事典」を中学生が見ただけでは、読書が嫌いな子どもにとっては自発的に学校図書館や書店で本を探したり、実際に本を読んだりすることは難しいと思う。「もっとおもしろ読書事典」の掲載本が自分の学校図書館内にもあることが示されたり、授業の中で教員が教科に関連して掲載本を紹介するなど、「(この本だったら) 読んでもいいかな」という気持ちにさせる、働きかけがあることが大切である。
- 本の内容だけでなく、本に関することについて広く話し合う機会が、本を好きになるきっかけになると思う。例えば、どんな場所で本を読むか、本をどうやって手に入れるかという環境に関することや、どんな本を面白いと感じるか、本の内容がどんな時に役に立ったかという自分自身に関することを身近な大人や友達と話すことが大切である。

【公立図書館や読書ボランティアの立場から中学生の学校での読書を支援する取組】

- 公共図書館に来てくれる子どもは本人または親が本を好きな場合が多く、本が苦手な子どもに対して直接アプローチできる機会が少ない。
- 公共図書館と学校図書館で頻繁にやり取りがあり、学校司書を通して学校のニーズが聞こえ、対応している。公共図書館が自宅から遠い子どもたちの中には、直接公共図書館へ来ることが難しい子どももいるが、学校を通じて公共図書館を利用してきている。

- 幼少期からの継続した読書支援の取組が重要である。高梁市や笠岡市などでは、公立図書館から各学校園へ毎月本・絵本の貸出があり、幼少期の読書をサポートしている。学校園にない本や、現場の教員とは違った視点で選んだ本が届くのは面白いと好評である。
- 読書ボランティアが学校園で読み聞かせを行ってくれることは有り難い。
- 図書館や本に興味を持ってもらうきっかけとなるよう、公共図書館から中学校に出向いて司書の仕事を説明した事例がある。
- 公共図書館内で中学生向けの「おもしろ読書事典」や高校生向けの「でーれーBOOKS」を活用した展示をすると、立ち止まって見てくれる人も多い。
- 県立図書館では、市町村立図書館を通じた資料の協力貸出や、司書への研修というかたちで学校への支援を行っている。県立図書館内の児童図書研究室では、児童図書の全点収集を開館当初から行っており、実物の本（児童図書）を見る場所や、児童図書に関する情報を提供することも学校への支援と捉えている。
- 読書ボランティア＝絵本の読み聞かせボランティアと思われがちだが、読み聞かせ以外にも素語りや朗読、学級文庫の整備や、保護者対象の研修会を実施したりする読書ボランティアもある。学校は目的に応じて読書ボランティアを活用してほしい。
- 絵本の読み聞かせは、幼少期では読書に興味を持たせるために有効であるが、自分で本が読めるようになった小学生期・中学生期では、自発的な読書への誘導としての効果は薄れるように感じる。中学生に対する絵本の読み聞かせは、授業前に生徒を落ち着かせることや、地域の方と交流することなどの読書以外の目的において実施された場合、メリットは大きいですが、読書ボランティア自身も目的を認識した上で読み聞かせを行う必要がある。
- 中学生が自発的に読書をするために、大人が読書をする姿を見せたり、本がどのように生活の役に立つかあるいは実際に役に立ったかという話を聞かせたり、読み聞かせ以外の支援があるべきだ。
- 地元の小学校や幼稚園で、中学生がボランティアで読み聞かせを行い、中学生が能動的に読書に関わる事例がある。